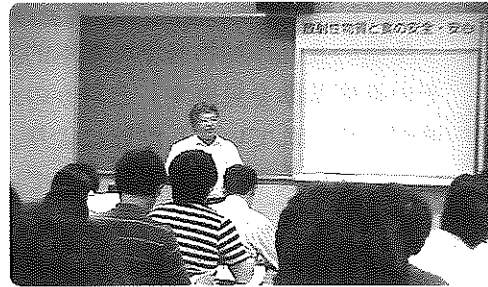


放射性物質と食の安全・安心 Q&A

原発事故による放射線汚染が広がり、放射性物質と食の安全・安心に関する組合員の不安・問い合わせが多数寄せられています。今回はそのいくつかを特集としてご紹介します。

Q. 放射線の汚染が広がり、とても不安です。生協ではどのように対応してるのですか？

A ご心配なお気持ちは良く分かります。先日の大阪府大の放射線学の専門家の古田雅一教授をお呼びしての「放射性物質と食の安全・安心」の学習会でも、以下のお話がありましたので要点を紹介します。



- ① 放射性物質の食品汚染で心配なのは半減期30年のセシウムだが、私たちが日常的にも海草等から摂取する放射性カリウム40などの自然放射線の方がはるかに放射線量が強く、問題は放射線の量。
- ② 放射線被曝量によりDNAが傷つきガン要因となる場合もあるが、政府による避難警戒区域の設定や食品の暫定規制値による出荷規制など現在の管理下では、仮に低線量の放射線被曝してもDNA自体の修復や免疫によりガンに至る心配はなく、むしろ喫煙や食事・運動不足など生活習慣による発ガンリスクの方がはるかに高いのが実態。
- ③ しかし、被曝量は少ないにこしたことはなく、大人より新陳代謝が高い子供は放射線の影響を受けやすいのは確か。大切なことは一面的な情報に惑わされず「放射線を正しく知ること、正しく怖がること」

生協では東日本の当該産地の農産物を中心に、主食の新米の放射性物質も公的検査機関のゲルマニウム半導体測定器で検査しており、現時点で放射能の暫定規制値を超える検出はありません。あくまで生協の検査は、原発事故災害特別措置法に基づく行政検査の出荷制限措置の判断・確定検査と違い、モニタリング(監視測定)で生産者同意の上です。一部の検査結果が全体の安全を担保することにならないこともあり、風評被害や優良誤認を避けるためにも、現時点で検査結果を公表しておりません。

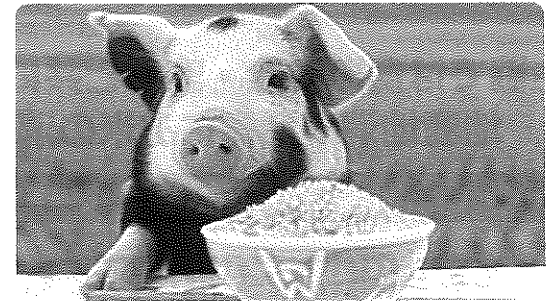
セシウム汚染の稲わらを食べさせた牛肉の汚染の不安も、生協では生産履歴管理と現地点検により、産直コープ牛は東北の稲わらを使用していないことが確認出来るなど、検査だけでない安全確認の努力もしております。滋賀県は県内19市町の新米収穫後の放射性物質検査を実施しましたが、放射性ヨウ素・セシウムの検出はありませんでした。また、11月から肉牛の全頭検査についても計画されています。

Q. 東日本の産直産地の放射性物質の独自検査はどうなっていますか？

A 不安の多い東日本の産直産地でも生産者独自の放射性物質検査を始めています。

平田牧場

東日本に養豚場が点在している平田牧場も8月より放射性物質の自主検査を始め、安全確認に努めています。



でんでん倶楽部

ブルームきゅうりの産直でお馴染みのでんでん倶楽部(ジェイラップ)も7月末に放射能汚染対策室を設置し、国の放射性物質の暫定規制値より厳しい出荷基準で、自主検査を始めました。その検査実態を確認してきましたのでご紹介します。



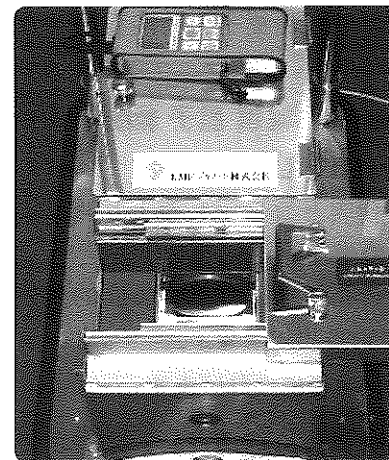
放射性物質検査用の農産検体

○ 自主検査の目的

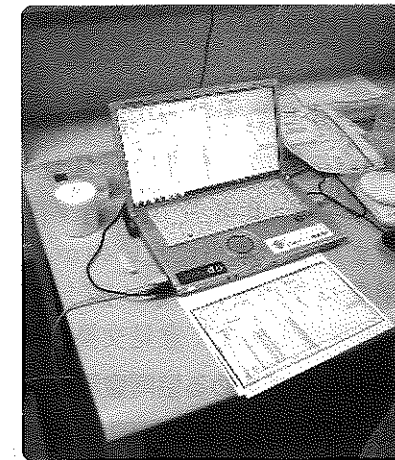
原発事故に伴う放射性物質汚染の風評被害に対する自己防衛として、消費者に安心して利用してもらうことに加えて、生産者の健康と生活を守るためでもあると言っておられました。

○ 検査の機器と方法

γ 線スペクトロメーターで検体隔離し、第三種放射線取り扱い主任資格を取って検査しておられました。検査も全ての取り扱い農産物を品目・生産・圃場ごとにきめ細かくきちんと検査されています。



検体格納遮蔽する測定器で、重さが100kg以上ある



測定結果をパソコンで解析する

国の暫定規制値より厳しい自主基準で出荷判断をされていますが、現時点で産直のブルームきゅうりなど基準を超える検出はありません。